

親役割に関する研究 (Ⅱ)

——乳幼児期の父親の家事・育児参加の評価をめぐる——

河野 利津子

(幼児教育科)

はじめに

“父親の再発見”(Lamb, 1975)以来, アメリカを中心として父親の役割やその意義・重要性が世界的にも注目されてきていることは, 周知の通りである。父親の家庭(家事・育児)参加については, 子どもの乳幼児期からの直接的なかわりが及ぼす発達への諸影響, 親役割と夫婦役割の関連あるいは親になることの意味や人間的成長としての親役割といった観点から実証的に検討されてきている。とりわけ60年代のフェミニズム運動や70年代以降の幼い子どもを持つ母親の就労傾向の高まりは, 父親の家庭責任・参加への要請を一層強めていったのである。

家族が多様化してきている現代, 多様な親や親子の有りようを認めながらそれらを検討する必要性が生じてきている。伝統的な家族, すなわち稼ぎ手としての父親と家事・育児を担当する母親と子どもたち(実子)という家族形態も崩れはじめており, 親になるという選択も含めて, 父(男)親, 母(女)親という概念や定義, 親としての役割の意味が再検討される時期にあるといえるのではなからうか。

アメリカにおいては伝統的家庭における父親不在の影響からスタートした父親研究も, 母子研究の莫大な研究成果を踏まえて, さまざまに進められてきている¹⁾。マザリングとファーザリングの量的・質的比較をしながらそれらの相違や類似性が明らかにされている。単親家族も増えている現在, 父親(母親)だけの子育ては, 子どもの発達上何らかの不利があるのか, 二つの性の親である必要性は何か, 代替しえない父性・母性の特質というものは存在するのか, 等の問題が浮かび上がってくる。

前稿(1993)では, 父親の家庭参加の規定要因に焦点をあてた。その中で積極的な父親参加の要因はさま

ざまに指摘されたが, 母親就労ということ, つまり共働きか片働きかという家族形態によりそれらの要因は異なること, つまり共働き家庭では家事・育児参加が非選択的な前提であることに起因する夫婦の葛藤や役割負担などを中心に挙げた。

本稿では, 父親の家庭参加が求められ, 増加している世界的動向を踏まえながら, その評価, なりゆきをみていきたい。積極的な父親参加が必ずしも全ての家庭で歓迎されているわけではないこと, 払拭しがたい伝統的な性別役割観は, 父親と母親の双方に葛藤や不満をもたらしていることなどが指摘されてきている。今回それらを具体的にとりあげて, 親子関係, 夫婦関係への影響をメリット, デメリットの両側面から明らかにしていきたい。

父親役割研究の背景

伝統的に, 育児・家事は女性の仕事であり, 男性は経済的にあるいは精神的に母親を援助することであるという役割分業観がある。いわゆるフロイト流の精神分析理論では, 発達初期の母—子の情緒的絆こそが後の子どもの精神発達に決定的であると述べ, 乳幼児期の母親の重要性を主張した。

また1950年代, 当時の社会学者パーソンズらが, 経済の担い手としての父親(男性)役割を手段的, 子どもをいつくしみ養育する母親(女性)役割を表出的役割とあらわしたことにより, 固定的な性別役割観は一層強められる形になった。父親は, 子どもにとって畏怖の対象, 近寄りたくない存在であり, 母親をサポートするしつけ手でもあった。母親は専ら家庭内の仕事に責任があり, 養育に適した性として, 暖かく, 支持的で許容的な存在であることに価値が置かれていたといえる。

当時, parenting とは即ち mothering のことを意

味し、親といえば主に母親を指していたことはこの点からもうなずけることであろう。

1950年から60年代は主として父親研究の中でも父親不在の研究が盛んになり、父性の欠如がもたらす子どもへの影響がさまざまに議論された。つまりこの時期は性役割モデルとしての父親が心理的・物理的に不在であることによって、子どもの認知・社会・情緒性などの発達がどのように影響を受けるか(歪められるか)という枠組みで、父親の重要性が取りあげられたのである。しかし、それは母性剝奪などの研究に見られるように、育児に適している母性の本質を、母親に固有の特質とみなした曖昧さと同様に、父性=男らしさと捉えていたものであり、親としての父親=父性は、中心的には性役割のモデルという考え方であったといえる。

新しい父親像が議論されるようになったのは、先に述べたように Lamb, M.E. (1975) のいう“父親の再発見”以後である。「父親も母親たりうるか」と、親としての技能や資質が問われ、育児スキルや親としてのコンピテンスが観察場面で実証的に検証されるようになっていった。父親として、より間接的な稼ぎ手という役割から、直接的な養育する役割へと役割の中心が移っていく中で、父親の親としての資質や機能が問われるようになったのである。もはや母性を母親に備わった本能としてでなく、両性が共有する心理的両性性 (psychological androgyny) という視点から、「養護性 (nurturance)」を重要な概念と考えた。そして乳児期から赤ちゃんを抱く、頬ずりをする、微笑みかける、身体的世話をするなどの養育行動に、母親と共にかかる「育児をする父親」が、新しい父親 “new father” と呼ばれるようになったのである。

乳児・幼児前 (infant, toddler) 期の父親の役割

乳幼児期における父親の役割を重視してこなかった伝統には、先述のフロイト流の父—子理論があった。すなわち子どもがエディプス期に達する4～5歳までは、母親との愛情に満ちた情緒的な関係が最優先されて、直接的な父親の影響は重要でないと考えられていた。

しかし最近では、精神分析の立場の研究者も生後2～3年間の父親役割の重要性を主張してきている。小児精神病の起源から健常児の正常な発達における「分離—個体化」の過程を仮定した Mahler, M.S.²⁾ の枠組みを用いながら、前エディプス期の発達における父親の意義・役割を明らかにしようとする研究がその中

心である。例えば、Applegate, J.S. (1987) によれば、生後3～5ヶ月頃の「共生的段階」は母親との心理的融合の状態であり、乳児は母親にとっての補助的の自我として振舞いながら、共生関係を維持している。そのとき父—子関係は、母—子関係に沿って、共生的特徴を共有しながら発達する。母親より2週間遅れて、父親に対する微笑みが現れ、加えて stranger 反応もみられる。

続いて5～10ヶ月の「分化の段階」では、‘hatching (ふ化)’ と呼ばれる共生状態から、分離—個体化のシグナルが発生する。つまり愛着 (attachment) が獲得されて、母—子が別々の個体であることの意識化がおこるのである。

次の10～15ヶ月の「練習の段階」では、第一養育者から移行的対象 (transitional object) へと興味が広がる。この時期の子どもにとって母親は安全基地であるため、子どもは必要とする時に‘補給’を求めて戻ってくる。また歩行と共に自律的な自我機能が発達してくる。父親に対しては‘母以外の特殊な他者’として注目するようになる。育児参加の多い父親は、乳児がより広い世界 (社会) にてある「練習」をする援助をしていくことになるのである。したがって、父、母ともに関与の度合いが高い家庭では、練習期に乳児が分離抵抗を示すことが少ない、つまり親から離されることへの不安がゆっくり現れたり、たとえそうでもすぐ泣きやんだりすることが分かっている。この時期に、関与度の高い父親は子どもの「練習」行動に安定感を育てることにより、移行を促進する機能を果していると解釈できるのである。

15～24ヶ月の「再接近 (rapprochement)」の段階には、より明確な分離不安が増大する。この危機を乗り越えることがうまく自我を発達させるこつであり、両面価値感情 (つまり、離れるのは不安だが外界も興味がある) を克服することが重要である。この段階では、父親は母子の外側にいて、遊びを仲立ちとして子どもを安定させる存在、また不安を解決に導く大切な存在となる。(父親が第一養育者であった場合には、父との共生的関係を解く役目を果たしたのは母親であったという。)

そうして生後18ヶ月までに、初期の父—母—子の三角関係 (triangular relations) が形成されるといえる。その後おおよそ生後30ヶ月までに、父親は子どもにとっての主要な遊び相手 (playmate) となり、そのほか子どもに外界を紹介する者—すなわち社会的発達の促進者、主たる社会化の担い手となる。さらに4

歳以降になれば、父親は性役割の学習や道徳性の発達に貢献する役割を担うと考えるのである。

こうして、結局生後3年間のいわゆる前エディプス期における父親の役割は、Mahlerらの分離-個体化過程の枠組みによれば、母子の共生的関係からの離脱を促進させ、母親以外の重要な人物として、主に刺激の豊富な遊び行動を通して関わりながら、子どもをより広い世界の認識に向けて援助することだといえよう。

母性行動(mothering)と父性行動(fathering)の量・質的比較

1970年～80年代初期にかけて、父子・母子関係の量と質を自然観察場面で比較をした研究が多くみられたが、それらに幾つかの点で共通の成果が認められた。相互作用の全体量という点では、いうまでもなく母親の方がかなり多く、遊びのかかわりの総量も母親の方が多かった。父親は子どもとのかかわりの量という点では母親に劣るといえるが、相対的に父親は子どもとの遊びが多くみられ、母親は身体的世話やしつけ的な行動が多いこと、を明らかにしている。また父親、母親の乳幼児との遊び行動のパターンを見れば、母親は比較的伝統的な遊び、玩具を使った遊び、言葉のやりとりなど言語的・訓育的遊びが多いという特徴があったのに対して、父親は粗野で、体を多く使った、刺激的で予測不可能な、冒険的な遊びが多くみられた。子どもを抱き上げる目的も、父親は遊ぶためが多く、母親は世話やしつけのためが多かった。

これらのことは、母親の方が乳幼児との遊びの時間量が多いが、遊び行動の質的な点からは、父親、母親それぞれに特徴があることを示唆している。これは男女の生物学的な性差によるものか、あるいは社会的な役割規範という要因が強いのか、検討の余地が残されている。

Lamb, M.E.ら(1982)は、スウェーデン人の父子相互作用について考察しているが、参加度の高い非伝統的父親と参加度の低い伝統的父親の比較をしながら、参加度の高い父親は愛情をもって抱き上げることが多く、参加度の低い父親には遊び行動が多くみられたという(母親については、逆に、よくかかわる母親はよく遊んでおり、かかわりの少ない母親は養育行動が多くみられた)。

この点については、Lamb(1982)の別の研究でも一貫した結果がみられた。スウェーデン人は家庭参加が男女において比較的平等であること、およびそれを支える育児保障制度が整っていることでも有名である

が、スウェーデン人の父親はアメリカ人の父親と比較すると、遊んだり、刺激を与えるなどの情緒的、表出的行動が少ないこと、またおよそ1/3の父親が第一養育者であるにもかかわらず、子どもが好む愛着の対象として母親を選ぶことが圧倒的に多かったこと、などの結果を明らかにした。このことは親(父)子で過ごした時間量よりも、かかわりの質が、親(父)子関係の質に決定的であること、つまり刺激に満ちた遊びのおもしろさ、playfulnessこそが父-子の相互作用において、愛着の形成に関与する心理的に重要な要因であろうと結論づけた。

父性行動の変数として、playfulness、子どもの世話、そして父親役割への満足度の3つをあげてそれぞれの先行条件や相互の関係をみたFeldman, S.S.ら(1983)はplayfulnessと子どもの世話との間に相関はみられないが、2つの父性行動の先行条件にはかなり重複する要因が多いことを述べている。例えば、仕事優先的考えが少ない父親ほど、行動上は遊びと養育のどちらにも現れるにしても、高い育児参加と関連があったし、また父親の高い職業への熱意は家庭参加への低さを示唆していた。また遊び行動の量は、夫婦関係の良好さとも関連し、父親自身の母親の肯定的連想との相関もみられた。世話の量は、子どもの誕生を心待ちにして、心理的リハーサルをしていたような父親に多かった、という。さらに、次の段階のライフ・ステージを計画しているような父親は、自らの関心をより実践的な子どもの世話という形で表す傾向がみられたという。

同様に父親の20ヶ月児の発達への影響やかかわりの特質をみたEasterbrooksら(1984)の研究では、父親が参加する意味は、子どもが母親といふときの子どもの特質とより明かに関連があった。すなわち父親が育児に関与するほど母親と息子の愛着関係は安定していた。また父子の安定した愛着関係は、敏感な父親の態度と、そして20ヶ月児の課題コンピテンスと相関があった。父親の養育行動の時間の長さは、子どものいずれの(発達)特質とも有意に関連していなかった。母親のかかわりは問題解決行動よりも、母子の愛着の安定性と強く関連していたのに対し、父親のかかわりの特質では、行動の敏感さや苛立ちのない安定した情緒が、一貫して20ヶ月児の最良の発達と関連していたという。父親の親としての特質が、母親と共にいる場面でより明確に現れること、つまり三者場面で親の'joint influence'が生じることを示唆していると同時に、Clark-Stewart(1978)の示したように、

幼児前期には父親は養育者としてよりも遊び友だち (playmate) として中心的な役割を果たすことを確認したのである。

従来の厳しいしつけ手としての父親のイメージは薄れており、懲罰や統制という親行動に関しても、母親の方が乳・幼児前期に行動の制限、望ましくない行動への懲罰を多く与えることが分かっている。自然観察場面でも母親の方が言語的・教育的働きかけが多いし、父親と比べて身体的接触が多いのは子どもを叱ることが多いからだとも考えられる。この点を指摘して、Pedersen, F.A. (1980) は、もはや父親はフロイト流の厳しい訓練者としてのモデルとはいえない、と述べているが、むしろ父親の許容性、感受性、やさしさというような要因が、Radin, N. や Sagi, A. らの主張する子どもの道徳性、共感、内的統制の発達と関連すると考えられる。

Radin, N. (1982, 1988) は、父親の育児参加の先行条件 (規定要因) にはさまざまあるとしながら、強力な要因として妻自身の父親像があり、その父親が育児によく関与し養護的 (nurturant) であったことを挙げている。また母親は自らの母親も働いていた家庭で育てており、それが心の傷になっていないこともまた重要な幼時期の要因としている。Sagi (1982) のイスラエル人の父親研究では、育児参加の多い父親は、自らの父親が温かく、nurturant であったことと関連していた³⁾。Russell, G. (1978) の研究対象となったオーストラリア人の父親についても、Bem ら (1974) の性役割尺度によれば「両性的」あるいは「女性的」であると評定された父親の多くが参加度の高い父親であったし、Palkovitz (1984) の研究では、5ヶ月児との遊びおよび養育の両方において、「両性的」父親が相互作用得点で最高であった。因果関係は十分明らかでないとしても、父親は厳しく距離のある存在ではなく養育的であることが、子ども、とりわけ乳幼児に親しみある存在として対象化される (愛着の成立)。そして父親との社会的な遊びを通して、父親を好ましいモデルとしながら、望ましい特性を獲得していくと考えられるのである。

Lamb, M.E. ら (1985) によれば、父親の遊びが子どもに直接影響をもたらすと考えるのではなく、遊びの楽しさによって、父親に好感をもち (好きになり)、そのことが父親を特別な存在にしていける。さらに成長するにつれて父親を承認・尊敬するようになるのであり、直接に教育的影響というより、間接的なモデリングにとってより重要だと考えている。

父親の遊び行動と乳幼児のコンピテンス

父親と母親の子どもとの相互作用の総量とスタイルを比較すると、量的には養育行動も遊びも母親の方が父親より多いということ、そしてスタイルの違いは母親が養育行動が多いのに対して、父親は子どもとの遊び行動が多くみられることはすでに述べた。乳児・幼児前期に第一養育者からの分離が始まり、他人へとしたいに興味の対象が広がる生後15ヶ月頃から、父親には楽しい遊び友だちとしての役割が拡大していくのである。それにつれて、母親の世話の量も減っていき両親の役割は類似性を増していくのである。

父親を遊び相手として喜び、抱き上げたり頬刷りされることを好むようになる時期には、すでに二人の親に愛着は形成されているのであり、15ヶ月の子どもは異なる目的で父親と母親のそれぞれを求めているわけである。

英米ではとりわけ父親は男児に対する注目・関心が高く、逆に母親は女児に対する働きかけが多いこと、父親は息子により制限的であり娘により許容的であること、父親の方が子どもに自分の性にふさわしい玩具で遊ぶことを奨励する傾向が強いことが言われている。それはそれぞれの親が自らを同性の子どもに性役割発達に重要なモデルであると認識しているためであり、また同性の子どもの方をより理解できるという現実的な理由にも拠ろう。Mahler の分離-個体化の理論枠に依拠しても、まさに1歳半頃は、母子の共生的関係は解かれ、性的同一化、性役割獲得の始まる時期でもあり、父親が豊富な身体・社会的遊びを提供してやることは、上の二つの意味で重要であるといえる。

15ヶ月児の探索的コンピテンスを調べた研究では、遊び場面での父親の身体接触は子どもの創造性のレベルと関連し、刺激 (事物・事象に注意を向けること) の量は、母親の場合は、子どもの適切な行動基準と関連したのに対し、父親の場合は刺激は子どもの創造性とも関連していたという。しかしその際、父親が子どものかかわりに消極的であろう空であったりすると、子どもの探索の時間は短く、創造性のレベルも低かったという (Belsky, 1980)。

つまり遊びを通しての身体接触やまわりの環境への興味づけは、子どもに喜び・快の感情を引き起こし、外界探索の動機づけを高めると考えられる。したがって父親が真剣にかつ積極的に父子遊びに参加することにより、人や物と柔軟にかかわる力や創造力を子どもに育てていくのである。

父子遊びと後の子ども同士の仲間関係をみた Parke

ら(1989)によれば、乳幼児期の父子の遊びは、相互の感情の表れ(提示)を認識したり、それへ反応したりすることを学んでいくという。そしてこの技能は、後の子ども同士の相互作用へと転移していく重要なものであることを強調している。このこともまた、父親(大人)との社会・情緒的遊びが子どもの人間関係能力すなわち社会的コンピテンスを高めることを示しているといえよう。

以上のように、父親、母親はそれぞれの子どものかかわりの特徴を持ちながら、親という共通の役割を果たしている。Belsky, J. (1979) は、父-母-子の相互関係を家庭場面で観察を重ねながら、父性・母性行動には類似性の方が多いことを、また家族システムの中での父性行動と母性行動の発達に注目しながら、一般的な子どもへの関与・かかわりと応答性などは父-母-子の三者関係の中で同じように発達していくことを明らかにした(1980, 1981)。

子どもに対する養育行動と遊び行動は、実際には明確な区分ができるわけではないともいえる。かかわりが多ければ、必然的に、Lamb のいうスウェーデンの父親のように、世話・養育の時間も増すであろうし、世話好きでも多忙な父親であれば、遊び的なかかわりに限定されるかもしれない。父子、母子がそれぞれ二者の関係にあるときは、親として父、母の働きかけにはほとんど相違は見られないが、父-母-子の三者場面では各々の性に特徴的な働きかけが増えるということ(Belsky; 1979, Pedersen, Anderson, Gain; 1980)からも、父性行動と母性行動は相違より同一性の方が大きいということができよう。

前述の Belsky(1980) は、父、母のことばかけの合計、言語的応答、刺激、単純な接触、の値をそれぞれについて高一低の組み合わせで比較したところ、母親のレベルが低く、父親のレベルが高い夫婦の組合せで、4つのコンピテンス尺度の得点が最高であったという。高(父)一高(母)の組合せではなく、高(父)一低(母)の組合せが子どもの探索動機づけを最も高めることは、示唆に富む結果と言わざるを得ない。

父親と5歳児の相互作用から父性行動の質をみた Grossman ら(1985) は、母親の育児に直接、間接にかかわる父性行動を関係の家族システムで捉え、「相補性(complementarity)」と「同一化(identification)」という語で説明している。つまり妻とは全く異なるやり方で、父親として子どもにかかわろうとする機能と、妻を直接のモデルとしながらよい親であるための学習をしようとする機能である。それらの

根拠として、彼らは妻が妊娠中に自律的だった夫は、5歳児との相互作用が有意に少なかったことや、有能で独立した女性が伝統的な家事・育児を選んだ場合、夫が子どもと多く時間を過ごすことを歓迎しない傾向がみられたことなどを挙げている。これについては専業主婦を選んだ自律的な女性は、子どもに深くかかわることにより自らの選択を正当化しなければならないからだという。また例えば産後にブルーな母親には夫がよくかかわってくれたり、母親の方が育児に喜んで専念するときには、父親は親役割にあまり関与しないなどの傾向もそうであるという。

家族をシステムとして捉える視点では、親役割の同一性が重視され、システムの中で相補う関係としての親行動(parenting)という視点が必要になる。Belsky(1984) は、parenting を規定する要因を、親の生育歴や人格、子どもの性格、ストレスとサポート源としての夫婦関係や社会的ネットワークとしてプロセス・モデルにまとめているが、そのなかで親役割と夫婦役割の関連については、従来の家族社会学と発達心理学の領域を超えた学際的研究領域として関心が高まってきた。

増える父親の家事・育児参加と夫婦関係

父親の家庭参加は、子どもの発達や働く母親の労働負担の軽減に大きく貢献し、父親としての人生をより豊かにする万能薬のように思える。しかし果してそう断言できるだろうか。すべての親に歓迎されるのだろうか。

最近では、家事・育児参加をめぐる cost と benefit についてさまざまな議論がなされてきている。父-母-子の三者の関係を包括してひとつのシステムと捉える家族システムの視点から、次に父親の家事・育児参加の夫婦役割、夫婦関係への影響をみていくことにする。

1. 親役割の満足度と夫婦間の葛藤

父親も母親も親であると同時に夫婦(配偶者)でもある。一つの家庭というシステムの中に、親としての機能と夫婦としての機能が複雑に作用し合っているのである。

父親の家事・育児参加についてプラス要因とマイナス要因を考える場合、それぞれの役割(親、配偶者、労働者)に「葛藤」と「満足・幸福感」の両側面がある。一般には父親の家庭参加は、夫婦関係の質を高め、夫婦の満足度を高めると考えられる。しかし他方、父親にとっては関与すればするほど稼ぎ手として

の役割 (breadwinner role) を妨げ、母親には伝統的な家庭内役割の義務の遂行の不十分さと夫の不満への気遣いを余儀なくされることも事実である。

Barnett ら (1986, 1988) によれば、育児によく参加する父親は親役割により有能で、自らの役割に満足しており、高い自尊心をもっていることが明らかにされた。しかし一方で父親の参加が増えるほど、自らの仕事(職業)に十分な時間が確保できないことへの不満が増加していたこと、また子どもとの関わりや育児時間が多く、自らを育児に有能だと感じていた父親は、母親としての妻に批判的で、妻の育児時間の配分などに不満を示していたという。また逆に、夫の参加度が高い妻は、自らに非常に懲罰的で、仕事-家庭葛藤を強く経験し、仕事のために家庭のことが犠牲になっていると感じる傾向が強かった。さらに夫が子どもとの時間を費やすほど、夫を父親として肯定的に評価しており、反対に自分の生活(人生)上の満足度は低いという結果であった。

すなわち父親の家事・育児参加については、父親と母親の双方に、葛藤と満足感のアンビバレントな感情があることを明らかにしている。共働きの母親はとりわけ家事・育児と雇用労働という2つの役割の過剰負担に苦しんでおり、それらを夫と分担することは歓迎されるべきことであるが、母親にとっても家事・育児は女性の責任であるという性役割観が心理的抑圧となり、親としてのコンピテンスを十分高めることができないのである。父親にとっても同様に、有能な稼ぎ手であることが男としての中心的なアイデンティティであるため、家庭関与によって時間的制約を受けることは、やはり葛藤を生むことになるのである。

Pleck, J.H. (1985) も指摘するように、働く母親の大部分は「家庭-仕事葛藤」や現実の過剰労働に苦しんでいるのである。にもかかわらず、夫の家事・育児の現状に満足していることは驚くべきことだが、働く/働かないとは無関係に、家庭責任は女性にあるという通念は深く浸透しているのである。それゆえ家庭領域は妻たちのテリトリーであり、心理的アイデンティティをその役割に帰属させているために、夫たちにこれ以上やって欲しくないと言えぬ妻も多いのである。

家事・育児参加については、それが父親にとって選択的であるかどうかは満足度と大きく関係するといわれる。つまり家庭が共働きであるか、片働きであるかという要因は父親の家庭参加に決定的であり、共働きの夫は家事・育児分担を強いられるのに対して、片働

きの夫は家庭参加の程度を自由に選べる余地があるということである。このことは、父親の参加の規定要因の研究においても明らかにされ、共働きの父親は夫婦間の満足度が相対的に低いとされている。

働く母親は、夫が家事・育児を公平に分担していると感じているほど夫婦間の満足度は高く、他方共働きの夫の夫婦間の満足度は、妻の方が自分より多く分担していると感じるほど高かったという (Yogev, S., Brett, J.; 1985)。原則的には、働く母親に関してのみ、父親の参加が夫婦間の満足度とより強い関連があるといわざるをえない。

この家事・育児の「選択の余地」と「公平感」は、増える父親の家庭参加の最大のプラス効果と夫婦の満足感を保証する上で、重要な指標といえることができる。

2. 単独の育児責任と家庭内雑事の分担

家事・育児への高い関与が、もし父親に心理的負担を及ぼすとすれば、父親が単独で責任を持つかわりおよび雑事の分担の問題であろう。先の Barnett らの研究では、子どもと2人で過ごすことの多い父親は、夫婦関係に緊張(疲労)を表すことが多かったという。他方、妻と一緒に(3者で)子どもと過ごす時間の多い父親は、自分自身を親として有能だと感じており、夫婦関係の緊張感は少ないという。

育児に関与するほど一人で子どもと接する機会も増え、いわゆる単独での責任を負わされることになる。共働きと片働きの家庭の育児分担を比較すると、父親が一人で(母親がいらない状態で)かわかることは、共働き家庭で2倍多く、それが夫の育児責任を増大させるため、夫の不満が募るのであろうと結論したものも見られる (Crouter, et. al, 1987)。

Russell, G. (1982, 1986) によれば、単独で責任を持って育児にかかわることは、父親としての肯定的感情や育児コンピテンスを得ると同時に、過剰労働と憤慨(resentment)という否定的感情も経験せざるをえないという。また彼は第一養育者である父親、もしくは妻と役割を逆転させた(role-reversed)父親の育児を縦断的に追跡しながら、父親の不満・心理的ストレスは専業主婦がもつ閉鎖的育児の諸問題と同じものであったことを明らかにした。共同する子育て(shared parenting)⁹⁾を提唱する立場からであるが、彼は父親も単独の育児責任をとることによってのみ、子どもの管理と社会化を共有するのに必要な知識と経験を得ることができると考える。父親も母親も単独で、子どもの世話も遊びもできて、責任も取ることができ

ならば、親役割上のストレスが最少でかつ満足感やコンピテンスは最大であるような育児を夫婦で共有できると考えるのである。

また家庭の雑事については、①伝統的に男の仕事(家庭内)とされてきたものは、短時間ですむものが多い、②男が女の仕事(家庭内)をすれば、目に見える結果となりやすい、③性を超えて(男性が女性の仕事に)貢献すれば、特別の努力によると評価される、という点をまとめながら、Beninら(1988)は、家事を分担する夫は、伝統的に女の仕事(雑事)だとされてきたものに携わらなければ、それ以外の仕事の分量がたとえ増えても、夫婦間に不公平感が残ることを主張している。夫婦間の満足度を高める家事分担の公平さについては、別の研究でも、夫が進んでやろうとする態度は妻にその種の仕事を認めて評価している、というシンボリックな意味を伝えているという分脈で、とても重要であると述べている(Kessler, Macrae; 1982)。Tbompson, L. (1991)もこの点について、働く母親にとって公平さの感覚は、いわゆる女の仕事の量と関連しているために結果的な労働量がより重要になるが、専業主婦にとってはむしろ愛情(caring)の表現であり愛する者への要求の施しと考えており、女の仕事の量は公平さには関係ないという。重要なのは、家事労働の分担にはシンボリックな結果すなわち自分たちの仕事の評価されていること一働いていようがいまいが一であるという。

3. 父親の家事・育児参加の範囲と質(レベル)の問題

Lamb, M.E. (1986)は、育児参加(子どもとの相互作用)を、以下の3つのタイプに分類している。①直接的なかかわり(engagement)②並行的なかかわり(accessibility)③育児責任(responsibility)である。①は一对一の直接的な遊びや世話のことであり、キャッチボールをする、食事を与える、宿題をみるなど、②は、①ほど直接的ではなく、TVを一緒に見る、台所で調理をしながら話し相手をするなど、③は子どもの健康と教育について責任をもっていること、である。例えば、病院に行く必要を知り予約を入れる、誰がつれて行くか分かっている、など子どもに関する一斉の判断ができて、それに責任を持っていることである。

Lambら(1987)は、それらの3つのレベルで2人親家庭(しかも専業主婦家庭)で相互作用時間と内容を調べた結果、母親のかかわりの中で①に費やされた割合は20~25%程度であり、父親と母親の最も大きな

違いは、③の育児責任であったという。また専業主婦家庭の父親は、①が全体の33%、②が全体の65%であり、③に費やされる時間は殆どないことが分かった。③が父親について非常に少ない傾向は母親の就労/非就労という条件とは無関係であることも分かった。つまり父親の育児参加は、時間量としては従来より増えてきたとはいえ、そして共働き家庭では夫婦で分担する方向へ進んでいるとはいえ、母親の方が未だ育児の全般的責任を担っていることは明らかなようである。

ここでいう③の育児の責任(responsibility)についてさらに詳しくみていこう。Barnettら(1984)によれば責任とは、①覚えて(remembering)②予定して(planning)③スケジュールに組むこと(scheduling)だとしている。Russell(1986)は①意思決定②計画③子どもの要求・感情・行動を監視して待つこと、だとしている。重要なことは、父親の多くは単に育児を「援助」しているのであって、「責任」をもつわけではないということ。つまり日常的な育児・家事の継続がなければ、子どもの管理をしたり責任をとることはできないという点である。

このように父親の育児参加が増加してくると、父親と母親がさまざまに協力し、補い合う側面がでてくるようである。直接に世話を施す養育行動や1対1で向き合う遊び行動は、子どもの必要性や欲求に応じて対処できる親行動であるが、監督や意思決定、計画等の「責任」領域では、絶えず子ども一人ひとりの状態を把握して、適切に判断を下し、最適の対応・援助についての決定をしなければならぬ。母子の直接作用する時間としては算出できない拘束時間であるとも言えるわけであり、その意味で従来から育児責任は第一養育者である母親の役割であったのである。

父親の家事・育児参加には参加の範囲・程度に加えて家事・育児の質の問題がある。先の役割逆転の、あるいは第一養育者となったオーストラリア人の非伝統的家庭では、主な母親の潜在的ストレスとして、父親の家事と育児の質の低さがあったことは、既に前稿(1993)でふれている。そのような非伝統的家庭では、母親の家事・育児参加が専業主婦家庭と比べて相対的に少ないため、母子の情緒的関係の貧しさや接触時間の不足などの不満のほか、それを補う夫の家事・育児の質の悪さが夫婦関係上の摩擦として生じてくるのである。この背景には、固定化された性役割観とそれに基づく「仕事一家庭葛藤」があるわけであり、働く母親は過剰労働の中で少しでも家事・育児の水準を維持したいと望んでいるのである。

現実の不公平感や不満は否めないにしても、家事・育児を男女で平等（公平）に分担しようとすることは少なくとも共働きの家庭においては、職業役割と親役割を両立させることを可能にし、かつ自己価値感や生活（人生）上の満足感を父親と母親の双方に高めていくことにつながるといえよう。

父親の家事・育児参加は、子どもの乳幼児期からの発達にとって、あるいは夫婦の満足・公平・幸福感にとって、さらに何にも増して親密な親子関係や親であることの喜びなど、家族にとって評価されるべき側面は多いのである。しかし他方、家族システムにおける夫婦関係と父子・母子関係には複雑な相互関係があり、夫婦役割と親役割は互いに支え合う部分と競い合う部分がある（Dickie, 1987）というのも事実である。夫婦2者関係から、子どもを含めた3者関係になる過程（親業への移行）では性別意識や態度が保守化し、3者場面では、親子関係あるいは夫婦関係のコミュニケーションに葛藤が生じやすく、乳幼児について夫婦の意見の不一致は顕在化する。親としてのパートナー関係は夫婦としてのパートナー関係を侵害するかもしれないという。家族の発達過程に沿って、親の役割・機能と夫婦の役割・機能のいずれかにウェイトを移しながら、全体としてバランスをとっていくことが肝要なのであろう。

おわりに

本稿では父性の特質と、これまで重視されなかった乳児期における父親の役割に焦点をあてて、増えつつある父親の家事・育児参加の家族関係に及ぼす影響をみてきた。父親に乳幼児期における *playfulness*, つまり身体・社会的遊び行動は子どもの社会・認知的発達に寄与する重要なファクターであること、母性行動と父性行動のそれぞれの特性やスタイルの違いは見られるが、むしろ親行動としての類似性の方が多いこと、さらに父親の家事・育児参加をめぐることは、父親・母親の双方に根深い伝統的性別観があり、かつ親役割と夫婦役割の複雑な相互関係があるために、必ずしも現実には高い育児参加が双方の満足・幸福につながるとは限らないことなどを、明らかにしてきた。

従来、*mothering/fathering* という対比は母親らしさ（母性）／父親らしさ（父性）の対比であった。女性らしい特性を備えた親と、男性らしい特性を備えた親が各々の領域（勢力範囲）で役割を分業することが前提であったのである。父親がわが子に妊娠前から、

関心を示し、あるいは乳児期から慈しみ世話をしながら、直接的に情緒的にかかわることにしだいに価値を置くようになってくると、「父性」と「母性」を定義することは非常に困難な課題であることが分かる。最近では、親としてのかわかりを総体と捉えて、'*parenting*' という語が用いられている。「育児」や「親行動」と同義に理解されるが、むしろ母性、父性に対立する言葉の意味合いをもたせて「親性」という訳語が使われるようである。親役割において男女それぞれの性の違いを強調するのではなく、成熟した人間としての親の機能・コンピテンスを重視する方向だといえる。家族が多様化している近年、このような視点はとりわけ重要だといえよう。

<脚注>

- 1) 父親役割研究のレビューについては、拙稿(1992)「父親役割研究における *new father* 論」(幼年教育研究年報)を参照されたい。
- 2) Mahler, M.S. らの共同研究の集大成といわれているものが、Mahler, M.S., F. Pine, A. Bergman, *The Psychological Birth of the Human Infant*. Basic Books Inc., 1975 である。
(邦訳「乳幼児の心理的誕生—母子共生と個性化」高橋雅士・織田正美・浜畑紀訳 黎明書房 1981)
- 3) これについて Sagi (1982)は、父親の育児参加は男性の手段的技能の欠如というよりも、表出的能力の補完と考えるべきであり、参加度の高い父親の表出性が子どもの内的統制、達成、独立心などの獲得を促進するのだらうと解釈している。
- 4) 例えば Parke & Sawin (1980) は、乳児の性別による父、母の働きかけの差を比較した。日常の養育にはほとんど違いはみられないが、情愛表現は異性の乳児に集中するという。注意を向けたり、働きかけることは同性の子どもに対して多かったという。親は新生児期からすでに男・女児に対して相補的な役割を演じているのであろう、と解釈する。
- 5) Rusell (1986) は *shared parenting* を次のように定義している。つまり子どもの管理と社会化について責任を共有することであり、また家族の支援と養護の必要に対して供給を共にすることである。

引用文献

- Applegate, J.S., Beyond the dyad: Including the father in separation-individuation. *Child and Adolescent Social Work*, 4, 1987, 92-105
- Barnett, R.C., G.K. Baruch, Correlates of fathers' participation in family work, In Bronson P., C.P. Cowan(eds.) *Fatherhood today: Men' changing role in the family*. John, Wiley and Sons, 1988
- Baruch, G.K., R.C. Barnett, Consequences of father's participation in family work: parents' role strain and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*. 51 1986, 983-992
- Belsky, J., Mother-father-infant interaction: A naturalistic observational study. *Developmental Psychology*, 15 1979, 601-607
- Belsky, J., A family analysis of parental influence on infant exploratory competence. In Pedersen, F.A. (ed.) *The father-infant relationship*. Praeger Publishers, 1980
- Belsky, J., Early Human Experience: A family perspective. *Developmental Psychology*, 17 1981 3-23
- Belsky, J., The determinants of parenting: A process model. *Child Development*, 55 1984, 83-96
- Benin, M.H., J., Agostinelli, Husbands' and wife's satisfaction with the division of labor. *Journal of Marriage and the family*, 50, 1988, 349-361
- Clark-Stewart, K.A., And daddy makes three: the father's impact on mother and young child. *Child Development*. 49, 1978, 466-478
- Dickie, J.R., Interrelationship within the mother-father-infant triad, In Berman, P.W., F.A. Pedersen (eds.), *Men's transitions to Parenthood*. Hillsdale, NJ. LEA, 1987
- Easterbrooks, M.A., W.A. Golding, Toddler development in the family; Impact of father involvement and parenting characteristics. *Child Development*, 55 740-752, 1984
- Fein, R.A., Research on fathering: Social policy and an emergent perspective. *Journal of Social Issues*, 34, 1978
- Feldman, S.S., S.C. Nash, B.G. Aschenbrenner, Antecedents of fathering. *Child Development*, 54, 1983, 1628-1636
- Grossman, F.K., W.S. Pollack, E. Golding, Fathers and Children: Predicting the quality and quantity of fathering. *Developmental Psychology*, 24, 1988, 82-91
- Kessler, R.C., J.A. Mcrae, The effect of wives' employment on the mental health of married men and women. *American Sociological Review*, 47, 1982, 216-227
- Lamb M.E., Fathers: forgotten contributors to child development. *Human Development*, 18, 1975, 245-266
- Lamb, M.E., Why Swedish fathers aren't liberated. *Psychology Today*, oct. 1982, 74-77
- Lamb, M.E., A.M. Frodi, C. Hwang, M. Frodi, J. Steinberg, Mother- and father- infant interaction involving play and holding in traditional and nontraditional Swedish families. *Developmental Psychology*, 18, 1982, 215-221
- Lamb, M.E., J.H. Pleck, J.A. Levine, The role of the father in child development: the effects of increased paternal involvement, In Lahey, B.B., A.E. Kazdin(eds.) *Advances in clinical psychology*. Plenum press, 1985
- Lamb, M.E. The changing role of fathers, In Lamb, M.E.(ed.), *The father's role: Applied Perspectives*. John, Wiley and Sons, 1986
- Lamb, M.E., Pleck, J.h., Charnov. E.L., Levine, J.A., A biological perspective on paternal behavior and involvement, In Lancaster, J.B., Altman, J., Rossi, A. Sherrod, L.R. (eds.) *Parenting across the lifespan: Biosocial perspectives*. Hawthorne, NY; Aldine, 1987
- Palkovitz, R., Parental attitudes and father's interactions with their 5-month-old infants. *Developmental Psychology*, 20 1984, 1054-1060
- Parke, R.D., MacDonald, K.B., Burks, V.M., Carson, J. Bhavnagri, N., Barth, J.M., Beital, A., Family and peer systems: In search of the linkages, In K. Kreppner, R.M. Lerner(eds.), *Family systems of life span development*. Hillsdale, NJ; Erlbaum, 1989
- Pedersen, F.A. (ed.) *The father-infant relation-*

- ship: Observational studies in the family setting*. Praeger, 1980 (邦訳「父子関係の心理学」 F. A. ベダーセン編 依田明監訳 新曜社 1986)
- Pleck, J.H., *Working wives/working husbands* Sage, 1985
- Radin, N., Primary caregiving and role-sharing fathers, In Lamb, M.E. (ed.), *Nontraditional families: Parenting and child development*. Hillsdale, NJ; LEA, 1982
- Radin, N., Primary caregiving fathers of long duration, In Bronstein, P., C.P. Cowan (eds.), *Fatherhood today: Men's changing role in the family*. John, Wiley and Sons, 1988
- Russell, G., The father role and its relations to masculinity, femininity, androgyny. *Child Development*, 49, 1978, 1174-1181
- Russell, G., Shared-caregiving families: An Australian Study, In Lamb, M.E. (ed.), *Non-traditional families: Parenting and child development*. Hilldale. NJ; LEA, 1982
- Russell, G., Shared parenting: A new childrearing trend? *Early Child Development and Care*, vol. 24, 1986, 139-153
- Sagi, A., Antecedents and Consequences of Various degrees of paternal involvement in child rearing: The Israeli project, In Lamb, M.E. (ed.), *Nontraditional families: Parenting and child development*. Hillsdale, NJ; LEA, 1982
- Thompson, L., Family work: Women's sense of fairness. *Journal of Family Issues*, 12, 1991, 181-196
- Yogev, S., Brett, J., Perceptions of the division of housework and child care and marital satisfaction. *Journal of Marriage and the Family*, Aug., 1985, 609-618

(受理 平成5年10月30日)

Abstract

A Study on Parental Role (Ⅱ)

—The Consequences of Increasing Paternal Involvement in Family Work—

Ritsuko KOHNO

(Department of Early Childhood Education)

From the 1970's through the 1980's, research on fathers had much attention and has increased enormously. "The new father" was defined to be an active, involved, and nurturant participant in all aspects of child rearing, and also one who is assumed to be a competent, skilled parent.

Varieties of research on parenting behavior have revealed more similarities than differences in mothering and fathering. We are convinced that fathers play important roles in a child's socio-physical development, and also contribute to reduction of working mother's heavy load of work. Increased paternal involvement in family work is, in general, welcomed and thought to have positive effects on every family, although it is not a panacea for all mothers and fathers, even for working mothers.

This paper discusses the consequences or effects of the father's increasing involvement on the father-child relation and husband-wife (marital) relation. The following are pointed out to be significant effects of fathering.

Firstly, the characteristics of fathering are salient in "playfulness" (playful behavior) when he plays with infant or toddler. This plays an important role in the child's socio-physical development and in subsequent social play with peer.

Secondly, although the father's participation is increasing in nearly every country, the mother is still the primary caregiver and thus is responsible for the child's socialization and care. So equal responsibility for childcare and fair participation in housework is necessary for effective parenting.

Thirdly, as marital and parental relations are interrelated in a complex way, some aspects of the marriage relation may enhance the parental role, whereas other ones may cause some competition. Because of the deeply-rooted sex-role traditionalism, not only working mothers but also non-traditional, involved fathers are struggling with sex-role identities, or so-called work-family conflict.

(Received October 30, 1993)